
佐竹さんちの日常

桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐竹さんちの日常

【Nコード】

N2164Z

【作者名】

桐

【あらすじ】

旦那（二次元）に溺愛の姉、通称ゲーム博士の腹黒シスコン弟に、シスコン弟以上の兄貴溺愛ブラコンの妹。そしてめんどくさがりやの自堕落主人公。

交友には、自堕落主人公のクラスメイトで漢字は違えど同じ苗字の委員長、シスコン弟の好きな人に、オタク姉の大好きな新撰組の名前に酷似した姉のクラスメイト。そして生活委員長に双子の友達、変態先輩などなど。

そいつらが送るごく普通の日常的な生活を、主人公視点に描いた物

語。(別視点もあるよ)
作品の都合上、割り込み投稿をさせていただきます。

カリストが……

赤い鮮血が飛び散る。真っ白い雪を赤く染め、まるで赤い雪が降ったかのようだ。例えこの真っ白い雪を汚すことになるうと、俺は攻撃をやめない、いややめることができない。

例え己の体までも真っ赤に染めようとも、この世の雪全てが赤く染まるうとも、俺は攻撃をやめることはできないのだ。そう、あいつを助けるまでは へぶっ。

「ねえ、またそのゲームやってるの？ あんたさ、何回その国の姫助けてんのさ」

「うるせえな。別に俺が何やるうと勝手だろ？」

「おにい、はやく僕と交代してよ！」

「おにいさまの次は私だし。ね、おにいさま？」

姉貴にたたかれ、やむなくゲームをストップさせるべくスタートボタンを押す。あのままだと俺の血でやつ等を真っ赤に染め上げないからな。

……あ、どうも。俺、サタケカツキ佐竹活樹と申すものです。決してどこぞの勇者とかではなく、ごく普通の平凡な中学二年生です。ま、どこにでもいそうな中学生です。

とりあえずご紹介させていただくと、俺の頭をぶったいたのが長女の莉桜。一応俺が長男で、その下にいるのが双子の陽介で、その片割れが日向。こういつてはなんだが、陽介と日向はコンプレックスのつくアレであったりもする。まあでもごく普通の兄弟姉妹であるからして。

「なにいつてんの、あんたたち。次はあたしだし。この新作ゲームやるんだから、さっさとどける活樹!」

「まあ、ちょっと待てよ。セーブするから」

全てを言い終わる前に、姉貴は何かにつかかったのか、こけた。それと同時にプツと目の前のテレビ画面が青くなり、その画面にはテレビ3、とうつつていた。

……急な展開すぎて、頭がついていかないんだけど。

「よ、よよよ陽介! あ、ああああんた、な、何コンセントにぬいてんの!」

「え、ええ?! ね、ねえさま、ぼ、僕はなんもしてませんよ?!」

「……あ! あたし、バイトあるんだった! よ、陽介、日向、あとはよ、よろしく!」

「ちょ、お、お姉ちゃん!」

そういつて慌ててその場から走り去る姉貴。理解したら、顔をあげる気力もでなかった。

「……お、俺の勇者が……。もうすぐで、姫様とか、夢のカンストが……」

「お、おにいさま! 今日は私と一緒に風呂はいる? ね?」

いや、それ、何の慰めにもなっていないから。むしろ俺の尊厳とか

を奪う発言だとすら思えるのだけど。

「はあ、とため息をつくど、テイロリン、と携帯が鳴る。空気嫁、携帯。ちなみに差出人は姉からである。」

内容は「あたしの買ってきた新作ゲームやっていいからさ！それと、何か買ってきてほしいものがあれば、なんでも買ってくるよ！」とのことである。

「おいおい、ご機嫌とりのつもりか？ てか姉貴が買ってきた新作ゲームって乙ゲーじゃなかったっけ？ 誰がやるか！」

「なんか無償にはらがつたので、前々からほしいと思っていた新作の初回限定版を要求してやった。てか、姉貴、今日バイト休みだろっが。」

「はあ。今日はもう泣き寝入りしよう。」

*

翌日。中学校にて。

俺が昨日の姉貴の所業を友達に愚痴っていると。

「あ、さ、佐竹。今日の放課後さ、暇？」

急に話しかけられて驚いてしまった。こいつの名前はクラス委員長、じゃなくて佐武渚^{サタケナギサ}。漢字は違うが、同じ苗字であり隣の席のときはしょっちゅう話しかけられたもんだ。佐武は学年人気ナンバーワンといわれている。なんでも、この学年の三分の一は佐武にメロメロらしい。俺は残りの三分の二に分類されるんだけどね。

で、その佐武は若干頬を赤く染め、何故か必死なようだ。……もしかして、怒ってるのか？ やべえ、俺なんかしたかな。

「さ、佐武……。俺、なんかしたか？ そうだとしたら、頼むから先生にはいわないでくれ」

説教、なんてことになったら帰宅時間が遅くなり、ゲームする時間が減る。それでなくても、昨日の分を少しでもリカバリーしなければいけないというのに。

頭をさげると、軽く佐武に小突かれた。

「ち、違う。ちょ、ちょっとあたしから頼みたいことがあって」

あーよかった。佐武から俺に頼みごとだと？ ……めんどくさそう、断ろう。

「ごめん、俺ちょっと急がし」

「はあ？ なにいつてやがんだ。お前、帰ったら昨日の分のリカバリーしなきゃ、とかいつてただろうが」

聞いてやがったのか、このハゲ……。って、こいつに愚痴ってたもんな、当たり前か。一応紹介しておく、こいつは俺の友達の佐々木勇輝。俺の数少ない友達でもある。

ちなみにこいつも例の三分の一に含まれているらしい。

「佐武、俺も一緒にいつてやるよ！ 活樹なんかと二人きりだと、何されるかわからねえしな。俺が一緒なら、安心だぜ！」

「佐々木と一緒にのほろが危ないよ。いいから、佐竹だけ、きて」

佐武は笑顔でさういうと、俺の耳元で場所を告げ、後に待っている、と言って元いた女子のグループのところへいった。正直いつて、

めんどろくさい。

まあその件については、あとで勇輝をしめるとして……。思わずチラツと佐武のほうをみると、女子共と何故か盛り上がった。

「な、なんで活樹なんか佐武が……」

「頼みごとがある、とかいってたる。それより、お前のせいで、俺の大切なゲームの時間が減ったんだから、責任とれよ」

「うるせえ！ もげろお前！」

「何を？！ てか何で俺、逆切れされてんの？！」

……つたく、昨日から本当ついていないぜ。それにしても、佐武みたいな人気者がこんな俺に何を頼むのかねえ。頼みごとなら、俺なんかより勇輝のほうに向いているだろうに。

忘れてた、とか言い訳は通用しないだろうか。ああでも、翌日が怖い。佐武は委員長だからなあ。

「くそう……なんで活樹なんか……」

お前はクドイ。油污れかっつての。

*

放課後、中庭の池前。佐武は掃除らしく、遅れるらしい。呼び出した本人が呼ばれたやつより早くくるとか、なんか無駄にわくわく

してるみてえじゃん。なんでこんなところで一人、鯉なんて眺めてなきやいけないのかねえ。

ポツンと鎮座されているベンチにどっこいしょ、となんと年寄りくさい声をだして座る。こんな陽気のいい日にボーっとしてると眠くなつてくからあ。

「あー……本来なら、今頃家に着いて即効ゲーム陽介から奪ってるころだろうなあ」

我が家では弱肉強食である。強さ的にいえば、やはり姉貴で、二番目が俺、日向。そして三番目が陽介だ。日向は一応陽介の妹なのだがな。まあ、数秒の違いだしいして違いはないのだが。

両親があつちこつち仕事の都合で色々いつているので、家事は姉貴と日向がほとんどやっている。だけど、母親が料理できず、それは遺伝なのか二人は料理は壊滅的だ。料理だけは俺がやっているのだ。そのおかげで、無駄に料理がうまくなって家庭科のときはまかされっぱなしで、困ったものである。

それにしてもねみいな。俺は眠気に勝てなくて、意識はなくなっていた。

カスタムが……（後書き）

新作です。

しばらく受験に備えて、本格的に勉強することになったので、しばらく更新はできません。

受験が終わり次第、また更新します。

悩める子羊な俺

陽気に勝てなくて、思わず転寝をしてしまった。寝起きのこの感覚は、何度も体験していたので寝起きに関しては何んの違和感も感じなかったが、一つだけ違うところがある。それは、今しがた気づいたのだが背中はこの感触。とても温かくて、心地よい感触なのだ……転寝する前はこんな感触はなかったはず。

なんだろう、と思いうしろを振り返ってみるとそこには今日、俺をこの場所に呼び出した人物だった。

「さ、佐武……？」

「あ、やっと起きたんだ。こんなところで寝ちゃってさ、こんなことされる、とか思わなかったの？」

いや、普通に考えて思わないだろう。頼みごとがあるっていわれてきてみたら、思わず寝ちゃって起きたら有無を言わずさうこうなっていたわけだし。

……さて、佐々木ならばこの状況、飛び上がって喜びそうだが俺は別にアレだからなあ……。

「え、と。その、だな。とりあえず離し」

「顔みたら、きつと言えないからさ。このまま、聞いてくれない？」

「お、おう」

って、なんで許可してんだ、俺?!普通に考えて、ここは断るべきだろうが!

だけでも今更それをいうわけにもいかなく、やむなくこのままに。
……そ、それにしても背中にも柔らかなのがあたって。
い、いかん。体のほうが反応してくるから考えないように思っ
ていたのだが、一度意識したらそっちのほうに神経がいつてしまっ
て、頭がくらくらしてきた。

なんてふしだらなことを考えていたら、佐武がぎゅっと力をこめ
てきた。俺の考えている事がバレたのだろうか。

「……それじゃ、本題言うよ。一度しか言わない　うん、言え
ないから」

「た、頼みことだろ？」

「うん、それじゃあ頼むね。あたしの話、ちゃんと聞いてて？」

耳元で囁かれるいつもより甘い声は俺の頭を更にくらくらさせ、
思考力を低下させるには十分な言い方だった。

何も言えずにゴクリとつばを飲み込む。また少しか俺を強く抱
きしめると、あの甘い声でほんの一言だけ、呟くとそのまま俺を放
し走っていつてしまった。

「……あ、あいつ……。い、いやでも、俺の聞き間違いか？」

とりあえず、帰ろう。帰って、誰かに相談して今後のアドバイスを
もらいたい。まあでも俺の身の回りで頼れるやつなんて、一人く
らいなんだけどな。問題はそいつが俺の相談にのってくれるかどう
か、ってことだ。

普通なら学年一可愛い、というか人気な女の子に言われたら嬉し
いはずの言葉であるのに、何故か俺の足取りは重く家につくまでに
何時間もかかったのではないかと錯覚してしまうほど考え込んで

いたと思う。俺らしくもねえ。

*

家に着いた。ただいまーと声をあげるとドタドタと足音がきこえる。これは妹が家にいる、ということだ。家にいるときは決まっておかえりと言いにきてくれるのでこれはいつも通りなのだが心なしか足音が多いような気がする。

靴を脱ぎ、自室へ向かおうとすると妹が抱きついてきた。ここまではいつも通りである。だけど、いつもと違うのは妹の友達と思われる女の子二人がきたこと。一人はポニーテール、もう一人は前髪を綺麗に揃えて若干茶髪ロングな感じの子たちである。
うむ、普通の子たちだな。

「こんにちは！ 私、神林沙月っていいいます！」

「こ、こんにちは。私は月城彩乃です」

「あ、ああ。こんにちは。俺は佐竹活樹っていいいます」

お二方、とても丁寧に挨拶されたので俺もつられて丁寧にいつてしまった。とりあえず陽介のところへ と思いゲーム部屋のほうをみると神林さんと目が合う。睨みつけるのもアレだし、出来るだけの笑顔でニコツと笑うと神林さんは顔を赤くして俺から目をそらす。……やべ、怖がらせてしまったのだろうか。

月城さんのほうは、早くゲーム部屋にいきたいのかそわそわした様子でゲーム部屋をチラチラと見ている。俺も丁度ゲーム部屋、というか陽介に用事があるので腰に抱きついている日向の頭を撫でて、

俺から離すと月城さんと視線を合わせた。

「月城さん」

「は、はい。何ですか？」

「えっと、月城さんは陽介と遊んでるんだよね？俺も陽介にたいした用じゃないんだけど、用事があるから一緒にいつてもいいかな？あ、日向。いつも迎えにくるうさん。神林さんと遊んでるなら、そつちいつてもいいぞ」

先ほど怖がらせてしまったのあるため、出来るだけ優しくいうとえ？と言いたげな顔で同時に俺のほうを見る。あれ、俺また何かおかしいことを言ってしまったのだろうか。

「あの、おにいさま。彩乃と今日遊んでいたのは私だよ」

「え、まじ？ てつきり月城さんが陽介と遊んでいるのかなって思っただけけど……。違っただね。ごめんごめん」

この子、さつきからゲーム部屋のほうチラチラみてたし、陽介のところはやく行きたいようだったし、陽介と遊んでるのはこの子かと思っただけだ。

でもまあ、思わぬ事実を発見できたみたいだな。この子、顔真っ赤だし。

「えーとそれじゃ、神林さん。一緒にゲーム部屋に」

「おにいさま！ 私たちも一緒にいく！」

「別にこなくてもいいよ。すぐ済む用事だし」

「私たちもいく!」

「あーはいはい、わかったわかった」

こうなった妹はもう何をしても決断を揺るがすことはしない。なんか妙に頑固なところがあるんだよな、コイツ。まあ人に意見を委ねることが多い俺と違って意見をあっちゃこっちゃ曲げないってところは、いいところなんだろうけどさ。

俺たちはそろってゲーム部屋へ向かう。日向は今度は腕に抱きついてきて、いつも通りの声をだすし神林さんもなんか色々俺に質問してくるしで、行くだけで少し疲れてしまった。そういえばこの子って、さっき俺のこと怖がってなかったっけか……。

まあ今は他人のことを考えている余裕なんてない。自分のことなんて滅多に考えないから、既にもういっぱいいっぱいなんだよ俺は。

悩める子羊な俺（後書き）

はい、あけましておめでとございます。

ただどお正月に関係のないお話です。新年早々眠いですよっと…

…。

クソ兄貴

「おーい沙月ー！ 今日、俺んち来るかー？」

どうも、俺陽介です。……あ、僕っていつてるのは莉桜ねえさまの前だけだよ？ だって他の人に猫かぶる必要はないっしょ。主にバカツキとかバカツキとかバカツキとか、日向とかの前はさ。莉桜ねえさまの前以外はほとんど「俺」を出してるよ。

ちなみに沙月っていうのは神林沙月っていうて、俺の好きな人だ。莉桜ねえさまももちろん大好きだけど、あくまで姉だからな。その辺はちゃんとわきまえてるよ。俺ア、日向とは違うんでね。

「急にどうしたの？」

「いや、ほら。前、俺のゲームテクみたいとか言ってたじゃん」

「そうだったっけ？」

「そつだよ。だから、今日はお前のために予定あけといてやったんだ」

「ふうん……覚えてないや。でもまあ、今日暇だし、ゲーム博士の家もみてみたいし……。じゃあお邪魔させていただこうかな」

よし！ きたこれ！ 今日莉桜ねえさまもないし、いるとしたらバカツキと日向だから問題ない。邪魔するようであつたら、部屋に押し込めて……。っと。それにしても、形だけとはいえ、二人きりか。もう、とどめ（コクハク）をさしても、いけるよな？ きつと沙月も俺のこと、好きだろうし。

なんて、プランを立てながらニヤニヤしていると、

「何ニヤニヤしてんの、陽介。気持ち悪いよ。あ、今日彩乃家につれていくから」

「は、はあ？ ニヤニヤなんてしてねえし。それに今日は沙月を家に招待したからだめだ」

「彩乃が私のおにいさまを見たいっていうから、家に行くの。あんなの事情なんて知らないから」

「お前の素敵なおにいさまなら目の前にいるだろ？」

「え、どこにいるのそんな人？ 私にはみえないなあ。……それにしても、活樹おにいさまはあんなに素敵なのに、もう一人の糞兄貴はどこがいいのすら、探すのに疲れるわ」

こんのクソ野郎……！ 俺のことボロクソいやがって。本当日向はバカツキ溺愛のくそブラコンだよな。俺だって、一応こいつの兄貴だっていうのに。

思わずため息がでちまうぜ。日向の話聞いて、沙月は何かに興味をもったのか、目をキラキラと輝かせ始めた。

「あれ、日向の家ってきょうだい三人じゃなかったの？」

「誰情報それ？」

「ゲーム博士。日向とゲーム博士と、あと物凄く美人で完璧なお姉さんがいるって。ゲーム博士からきいたんだけど」

「なんでおにいさまが抜けているの。てか、どんだけシスコンなの」

「……ふんっ。お前にだけはシスコンとかいわれたくないね」

「残念ながら、私はシスコンじゃありませんから。まあお姉ちゃんのことでも好きだけどね。あ、そうだ、沙月。活樹おにいさまはね、こいつなんかよりずっとずっと素敵で、かつこよくて最高のおにいさまだから!」

「へえ……てつきり日向がいつもいつてたおにいさまってゲーム博士のことかと思ってた」

「はあ？ なわけないでしょ。なんで私がこんなのおにいさまなんて呼ばなきゃいけないの」

「でももう一人お兄さんいたんだあ。……ねえ、ゲーム博士！ 私も活樹さんに会ってみたい!」

「うああああ……。こ、こんのクソ日向がアア！ プラン立てて、数分で崩れ去ったよ!」

あんなバカツキなんてみせたら、絶対幻滅される……。あんなのが俺の兄貴なんて、知られたらもう学校になんていけねえよ、沙月に嫌われちまうよ……。

な、なんとしてでもそれだけは阻止せねば。

「で、でもバカツ……兄貴は今日、遅くなるとかいつてたぞ?」

「はあ？ 何嘘いつてんの？ おにいさまは今日、直帰ですう。私のおにいさま手帳にかいてるもん」

おにいさま手帳ってなんだよ！ てか素直に教えるバカツキもバカツキだよ！ …… って、いえたらいいのにな。以前、こいつの前でバカツキとか兄貴の悪口いったら、俺のコレクション翌日には灰になってたから。泣いたよ、あの日はほんと。

日向はそのおにいさま手帳らしきものをだし、うつとりとした表情で中身をみている。きつと、兄貴の写真とかが入っているのではなからうか。

沙月はそんな事情はもちろん知らず、期待に胸をふくらませているようだった。

「へえ……。そんなにすてきなお兄さんなんだ。楽しみだなあ」

……もうどうにでもなれ。こうなったら、兄貴を利用して、俺の株価をあげてやらア。

*

俺と日向と沙月と彩乃は学校を終えると、俺んちのゲーム部屋へといく。ゲーム好きの俺ら姉兄弟妹キョウテイにとっては、必要不可欠な部屋であり、親に必死になって頼んだっけ。

気づいたら、昔のゲーム機なども買って小さなゲームセンターみたいになっている。

「うわ、うわうわうわ！ ゲーム博士の家すごいねえ！」

「ほんとほんと！ 陽介くんの家、なんか知らないゲーム機まであるし！」

「いやあ、そんなに褒められると」

「そういう古いゲーム機はお姉ちゃんがバイトしたり、おにいさまが誕生日に買ってもらったものだよ。コイツ、自分じゃテレビゲーム機とか、買ってもらったことないし」

「……な、なんなんだよ、コイツは。俺の株価を下げるかのように、悪口ばっかよう……！」
「なにが俺にうらみでもあるのか？」

「あ、そういうえば、お兄さんは？」

「おにいさま、まだ帰ってきてないみたい。一目見たら、絶対にかっこいいと思うよ。でも惚れないでね、私のだから」

日向が笑顔でそういうと、ただいまーと気の抜けた、なんともやる気のなさそうな声が聞こえた。いつもはゲームとられてっけど、今日はとれねえだろ、さすがに。

その声を聞くやいなや、日向は風のようにダッシュで玄関へと向かっていった。

「じゃあ彩乃、お兄さんのことみにいこうか！」

「うん、陽介くんもいこ？」

「俺はゲームの準備すつから。兄貴なんていつでもみれるしさ」

俺がそういうと、彩乃は少し残念そうな顔を浮かべ、それを隠すように沙月と玄関のほうへ向かった。今日こそ兄貴得意のカクゲーで、コテンパンにして沙月の目を俺に向けてやらア。兄貴に勝つた

めに練習したんだからな。

かの有名なカクゲーをゲーム機にセットし、二人分コントローラを用意する。伊達にゲーム博士なんて呼ばれてないことを教えてやるぜ、ふははは！

悪いな兄貴、なんて考えていると沙月の意気揚々とした声がきこえてきた。日向の甘い猫なで声が聞こえるってことは、兄貴も一緒か。

「あ、陽介。ちょっと話があるんだけど」

「あ？ 何のようだよ」

「いいから、ちょっとこい」

なにやら、真剣な話のようだ。兄貴がいつにもなく真面目な顔をしている。

まあ、だったら兄貴も本気だしてくれるだろう。

「……俺にゲームで勝ったら聞いてやるよ。……沙月、ちゃんとみてろよ」

「うん、もちろん！ 活樹さん、頑張つて！」

「なんで兄貴を応援？！普通俺じゃね？」

「陽介くん、頑張つてね！」

「……あ、お、おう」

何故か彩乃に応援された。日向は心なしか、ちょっと不機嫌そう

にしている。恐らく沙月がバカツキにくつついてるせいだと思っただが……。俺も機嫌悪くなってきたぜ、なんか。俺はイチコン（1Pコントローラー）をとり、兄貴にニコンを渡す。そしてキャラを選択し、格闘を始めた。

結果、惨敗。

最初は結構いい勝負だったんだ。兄貴の攻撃パターンを研究してそれを回避して……。でも兄貴は巧みな動きと技を使い、俺に一回も倒されずにアイツは勝った。

「じゃあ、あとで俺の部屋こいよ。約束は守ってもらっからな」

「わ、わかってるよ。コイツらが帰ったら」

「活樹さん、行っちゃうんですか?! 私たちと一緒に、遊びませんか?」

「でも邪魔したら悪いだろ? 陽介とか日向も友達同士で遊びたいだろうし」

「そんなことはありません! ね、ゲームはか……佐竹くん、日向! 活樹さんも一緒に遊んでもいいよね?!」

なんで、沙月はこんなに必死なんだ? それに前は俺のことを名前で呼ぶときは、陽介ってよんでいたはずなのに。も、もしかして……。

チラッと日向のほうをみると、アイツも同じように俺のことを見ていた。どうやら、考えてることは同じらしい。

今の日向とは、利害関係が一致している。俺たちはアイコンタクトを取り、なんとかそれだけは阻止せねば、と互いに動く。

「さ、沙月。このあと、俺たち勉強会する予定だろ？ 兄貴がいたら、邪魔になるぜ」

「あれ、そんな予定あったっけ……？ でも、あったとしても、活樹さんがいたら、教えてもらえるとと思うよ！ ……優しいかな、お兄さんだし」

「で、でもおにいさまもやりたいこと、あるんですよね？」

「え？ いや、俺は今日特にすることはないけど。勉強会するなら、出来る所なら教えてあげれるよ。……あ、もし邪魔じゃなければ、だけど」

「こ、こんのクソ兄貴イイ！ 俺が宿題教えてっていったら、グレカスとか意味のわからんこといつてきたくせに……！」

結局、兄貴は俺たちの勉強会などに参加。そして、沙月にメールでまた活樹さんに会いに行くね、などという俺にとっては非常に酷なメールが届き、その日は泣き寝入りすると思いきや、兄貴が部屋に尋ねてきた。

……さて、いつになく兄貴が真面目な顔をしていやがる。ちょっと今日の仕返しにからかってやろう。

クソ兄貴（後書き）

陽介視点です。

頭の中にどンドン構成ができた、更新ストップなんて酷すぎます……。

また息抜きにかきにきちやつかも……。

身も蓋もない

あれから陽介とゲームしたり弟妹の友達に勉強を教えたりと色々した。まあ小学六年生程度のことならば、俺も教えてあげられるかな。あまり勉強しないとはいえ、俺はそこまで馬鹿じゃない、と思う。

それで六年生組みの勉強会が終わったら、再びゲームをして遊んだ。なんで俺こんな六年生と遊んでるんだ、と思ったのだが今日は暇で特にすることもなかったからなんだよな。元々は昨日姉貴に消された分のゲームをリカバリーするために、早く帰る予定だったから。

神林さんと月城さんが家に帰り、俺も自室へ戻った。少し休憩したらアイツもくるだろうと思ったのだが、待てど暮らせど来る気配を感じない。これは俺から来い、ということなのだろうか。

めんどくせえ、とは思いつつも立ち上がる。このままだと解決できないまま、明日になって佐武と気まずくなってしまふからな。それだけは避けたい、そういうのめんどいし。

自室を出て、数歩歩いた先の隣の部屋のドアをノックし、入室する。すると俺が声をかけるよりはやく、何かが俺の腰に巻きつく。

「おにいさま？ 私ならいつでも準備はできてるよ？ でも今は糞陽介がいるから、またあとで私からおにいさまの部屋に」

「準備ってなんの準備だよ！ いつも俺が部屋に入るたび抱きつくのはやめろっていつてるだろうが。それに今は陽介に用事があったんだな」

「え？ ……そうなんだ、それは残念。でもたまには私と二人きりになってセッ」

「誰がするかアア！」

つかどこで覚えたその単語！　　たく、最近のマセガキは恥ずかしげも見せずにこんな単語を使つて……。こいつひよつとして、そういうことに好奇心旺盛な陽介より知ってるんじゃないの？　……はあ、お兄ちゃんため息でちゃうわ。

陽介も呆れたようにため息をつき、早々にこの場から立ち去りたようだった。そりやそうだわな、俺も同じだもん。

日向は名残惜しそうに俺の腰を離し、自分の机へと向かう。それと入れ替わりに陽介が俺のところへ来た。だけど日向は何かを思いついたのか、あつ、と声をあげる。

「それじゃあ私はお風呂に入って、おにいさまと糞陽介の用事が済んだころにコンド　　」

無言で扉をしめてやった。てかアイツ、なんでそんなの知ってるの。マジで持つてるのかよ、近藤さん。俺でさえ見たことはあつても触ったことはないぞ。あ、見たことあるつての実物じゃなくて画像とかで、げふんげふん。なんでもない。

陽介はそんな複雑な心境の俺に哀れみを含んだ目で俺を見ていた。

「兄貴、頑張れ」

「何を？！お前は俺に何を頑張れというんだ！」

こいつまでこんなことを。この家に俺の味方はもういないというのか……。

「それにしても、日向は兄貴のどこが好きなんだか。理解しかねる

ね

「あ？　なんだ、羨ましいのか？　かわってやるうか？」

「恐ろしいこというな。アイツのブラコン対象がもし俺だったら、同じ部屋の俺はどうすればいいんだ。逃げ場ねえよ」

まあ、確かにその通りなんだろうけどコイツも人のこといえないよな。陽介も正真正銘のシスコンだし。

「うるせえな、兄貴だってシスブラどっちもあんだらうが」

「何お前、人の心よんでんの？　やめてくれない？　そついうの。それにシスブラってなんだよ。俺にはどっちもねえよ」

「顔にでてんだよ、このシスブラ」

「けっ、シスブラはどっちだ。」

お互いに無言になったところで、俺の部屋へと向かう。この相談は日向に聞かれたらマジですごいことになりそうだし。……いろんな意味で。

まあ向かうつつつっても、隣の部屋だから大して距離はない。けども、大声をあげてはいけない。隣の部屋にいる日向にきかれてしまつ。何の因果か、俺がベッドを置いている位置の隣に日向もベッドをおいているらしい。つまり毎晩隣で寝ている、というわけだ。薄い壁はあるぞ、当然。薄い壁はあるんだからな？　大事だから二回いったぞ。

俺の部屋のドアを開け、陽介に入るよう促し座らせた。そしたら何故か部屋をキョロキョロと見回しはじめる。

「相変わらず殺風景な部屋だな。なんだよ、この本棚は」

そういつて本棚のところへ向かい、俺の宝物（エロ本ではない）の本を物色している。俺はライトノベル系の本が好きであり、まあつまりその本棚には俺の夢と希望とロマンが詰まっているというわけだ。

陽介は何冊か適当に本をとり、それらをパラパラめくって流し読みするとすぐに本を戻した。

「エロ本のひとつもねえのな。全部オタク系の本じゃん。まあそれっぽいのはところどころにあったけど」

「うっせえな、別にいいだろライトノベル好きなんだから。それに、エロ本全部すてたりあげたりしたんだよ」

「は?! な、なんで?」

「……前さ、日向が俺の部屋きたときエロ本発見したみたいで。翌日、俺が折り目つけてたページのところの人と似たような格好で俺の部屋きて、襲われた」

「へ、へえ……」

「それ以来この部屋からもうエロ本は……」

流石の陽介も今のは茶化せなかったのか、黙ってしまった。……わかるか? 俺の気持ちだ。それ以来、日向は俺の好みがツインテールだとわかったのか、毎日ツインテールするようになったからね。襲ってきたのは最初の日で、必死の説得により何とか部屋に帰ってもらえたけど、すごい複雑な気持ちだよ兄貴として。

襲われた日から、家に帰ってきてからたまに物の位置がずれてたりしてたこともあったし……。

だからもう、俺はエロ本部屋から消失計画をたてたわけだ。惜しいけど捨てたり、勇樹にあげちゃった。……なんで中学生のくせにエロ本もってるかって？ ふっ、それは企業秘密というものなのだよ。

「ま、まあ……。あれだよ、うん。頑張れ！」

「だからお前は俺に何を頑張れっていうんだ?!」

「てか兄貴の性欲の行き場なんてどうでもいいんだよ。さっさと本題言え。俺だって、ゲームしてえんだから」

「あ、ああ……」

本当にこいつで判断は正しかったのだろうか？ 今更な疑問が浮かび上がったが、考えてもコイツしか浮かばなかったのだ。数少ない男友達の佐々木は佐武のこと好きだし……。だからコイツにか聞くことができない。

俺を意を決して言葉をだした。

「俺、さ。学年一人気の女子にコクられたんだけど……」

「……寝言は寝て言えよ」

「嘘じゃねえよ！ マジなんだって！」

「妄想と現実を一緒にしてるんじゃないか？ マジで？」

「お前は俺をどんな風に思っていたんだ。マジだよ」

「……まあいいや。仮にそうだとして、それで？　なんていわれたの？」

「う、後ろから抱きつかれて、ちょっと話して好きっていわれて…」

思い出すだけで顔が赤くなってくる。妹を除き、って含めていいのかわからんが、とにかく血のつながってない異性から好意を抱かれたのは初めてなのだ。それも学年一人気者の女子に、だぞ？

嬉しくないわけがないのだが、やはり付き合う、となる。普通段あまり使わない頭をフル回転させ、必死に考えを巡らせていると、

「それさ、本当に告白か？」

などと、身も蓋もないことを言い出したのである。

「だ、だって好きっていわれたんだぜ？」

「じゃあ聞くけどよ、兄貴みたいなめんどくさがりやの自堕落野郎に、その学年一人気者の人が好きになると思つか？」

「た、たしかにそれも一理あるが……。だ、抱きつかれたんだぞ？」

「後ろからだろ？」

「お、おう」

「逃がさないようにするためだったかもしれんじやないか。あと、好きって言われる前はなんていわれたんだ？」

「た、たしかだな……」

……あれ、何ていわれたんだっけ？ やべえ、抱きつかれたときの背中感触しか思い出せねえよ。てかそれに気をとられて、好き以外に何を言われたかまったく脳に記憶されてねえ。

頭を抱えて必死に思い出そうとする俺に、陽介は呆れたようにため息をついた。

「じゃあさ、付き合ってたか言われた？」

「それは……たしか言われてない」

「好きって言われたからの会話は？」

「な、なかったはずだ。その人、俺のこと好きっていつてから走っていつちまった」

「ふうん……どこのエロゲだよそれ」

「おい、お前今なんていった。言ったことによってはきれるぞこの野郎」

「なんでもねえよ。じゃあさ、例えばだけど好きのあとにまだ言葉続いてたんじゃねえの？ 兄貴がそれを聞き逃したとか」

な、なん……だと……?!好きのあとに続きがあるとか、考えもしなかった。でもたしかに、その線はあったかもしれない。

そういうのもちゃんと考えとけばよかつたぜ。

陽介はちよつと納得した俺に更に追い討ちをかけるように言った。

「例えばさ、兄貴は後ろから抱きつかれたんだろ？ 無防備だったわけだし、隙だらけだな、とかスキルをもつと磨いたほうが良い、とか言われたんじゃない？」

「な、なるほど……。そういえば俺、その人が来るまで寝ちゃってたしな」

「どうせ兄貴のことだから授業中も寝てたり、休み時間るときもボーンと過ごすことが多いんだろ？ そういうのの忠告も含めてるんじゃないね？」

「で、でもだったら、別に放課後に呼び出す意味ねえだろ」

「馬鹿か、お前は。そんなこと教室でいったら、変な噂が立つだろうが。兄貴とそういう噂立って、嬉しい女がいるか？ とにかく、隙ばつかみせてるから見るに見かねてその人気者の女子が、ご親切に忠告までしてくださったんだろ？ 感謝しろよ、その人に」

物凄く説得力のある言葉たちだった。たしかに、その通りかもしれない。

でも何でだ？ コイツ、何でこんなに楽しそうなの？ だけど、俺がその疑問を口にするより早く、もう部屋に戻るといって、俺の部屋をでていった。

……まあとりあえず、明日からもつと警戒心を強めるとしよう。久々に色々考えたら疲れた。明日の準備してもう寝るとするか。

*

翌日、中学校。俺の教室にて。

昨日決めたことを元に、俺は警戒心を強くし、休み時間とかも警戒を怠らなかつた。これは朝の出来事である。

「さ、さささ佐竹！ お、おは、おはよう！」

「む、佐武か。おはよ。……ええと、昨日はありがとな！」

俺がそういうと、佐武は不安そうだった顔をパアッと明るくさせた。何か喜んでるようである。どうやら、佐武も忠告どおりに俺が警戒心を強めたことを喜んでくれているのだろう。

「じゃ、じゃあ佐竹もあたしのこと」

「たしかに俺は今まで警戒心が甘かったかもしれない。これじゃあいつチヨークが飛んでくるかわかったもんじゃないな。昨日の忠告、本当に感謝してるぜ！」

「え、は？ ちゅ、忠告？ な、何のこと？」

「昨日放課後さ、俺に隙だらけ、とかスキルを磨けとか言っただろ？」

「え、い、言っただけ、そんなこと……」

「言っただろ？ 無防備な俺に。最初はさ、告白かと思ってドキドキしてたんだが、よく考えたらそんなわけないもんなあ。だって俺

たち、ただの友達でしかないもんな！」

まあこれはよくよく考えたら当たり前なことだ。陽介の話を聞くまでもなく、じっくり考えればこの結論に至れたはずだったんだよ。笑顔で良い台詞を聞かせてやるつもりだったのだが、何故か佐武はこの世の終わりみたいないな顔をしていた。も、もしかして……。

「佐武、まさかお前……」

「い、いや違うんだよ、本当！　だってあたしは　」

「お前も俺のことを狙っていたのか?!　敵に塩を送るってやつか?」

「……もう知らない!」

そういつて佐武は俺の頬を引っぱたき、どこかへ行ってしまった。……もつと警戒心を強めて、かわせということなのだろうか……。

身も蓋もない(後書き)

二日連続投稿！ 前回は短かったなので、今回はちょっと長めです。
章の分け方がいまいちわからない……。
評価とか感想、募集しています。

たしかにそうだけでも

「よっ、活樹。なにしてんの？」

昼休み。なんかもう警戒心を強めるのがだるくなってきた俺は机に突っ伏して寝ていた。そこに、生徒会の生活委員長 イカラン 五十嵐朱音カネが俺の頭を小突く。朱音は低い位置にポニーテールしており、学業優秀でとても面白いやつである。俺的には女子の中で一番仲がいいと思っていたり。あと特徴といえばボクっ娘であったり、俺によく勉強を教えてくれたりもしている。あ、恋愛感情とかは一切ないぞ、お互いにな。

ちなみに佐武も委員長だが、それはクラスの委員長であり、佐武は生徒会ではないので、一応補足しておくことにする。

俺は何もしてねえよ、と適当に返すと朱音はニーツと何かたくらんでいる様な目で俺を見てきた。

「活樹さ、ナギちゃんに告白されたんだって？ 噂になってるよん」

「は？ 告白？ てかナギちゃんって誰？」

「ナギちゃんっていったら佐武渚ちゃんのことっしょ」

「……ああ、渚だからナギちゃんね。ああ、はいはい。っておいちよっと待て。告白なんてされてねえぞ」

「いや、ただの噂だからね。ボクとしては真偽を確かめたかっただけ。嘘ならいいんだ、別に」

「ふーん……そうか。じゃあさ、悪いけど寝かしてくれねえか？

久々に授業中寝ないでいたから眠くてよ」

「え？ 嫌だ。暇だから図書室に付き合っつてよ」

「ほかのヤツに頼めよ。お前なら俺みたいなのヤツじゃなくて、他の女子とかといけばいいじゃん」

「そんなつれないこと言うと服装点検のとき、毎回活樹のところにチエックいれるよ？ それでもいいの？」

「ちよつと待て、それは理不尽ってやつじゃねえのか？ 見るよ、俺の服装のどこに乱れがある？ 俺の心みたいにキチンとしてるだろうが」

「へえ、キチンとしてるんだ。それじゃあワイシャツをキチンとズボンにいれてないところとか、袖のボタンをきちんとはめていないところとか、ブレザーの第二ボタンがちゃんとしてると見せかけてとれていたりするところを担任いつでも問題ないね？」

はい、見事俺の服装の乱れを全て言い当てました。てか俺座ってるのによくみえたね。特にブレザーの第二ボタン、我ながら上手く隠せていると思ったのに。

「……わかりましたよ、委員長さま。ついていけばいいんだろうが」

「はい、それでよし。おとなしく最初からそういつていけばいいんだよ」

相変わらず朱音にはさからえない。朱音は他の女子とかには結構いじられキャラなのだが、俺相手だといじってくるし、毒舌になる。

二年に成り立てのとき、それとなしに聞いてみたのだが俺をいじるのが楽しいとか言いやがった。なんかツツコミが笑える、だとか。いや、好きでツツコンでるわけじゃないからな？

朱音は俺の制服の袖をつかみ、無理やり立たせそのまま引っ張る。俺はめんどくさいので、そのまま引っ張られるがまま歩いてたら朱音に歩けと小突かれた。いや、俺はついていくとはいったけども…。

不服そうな顔を朱音に向けるととてつもない笑顔で返された。はい、申し訳ないです。

眠気が襲ってきて、思わず欠伸をしてしまう。そこに俺を呼び止める声が聞こえたので、俺と朱音は歩みを止める。そこにはたしか違うクラスの……名前忘れたから君は名無し君と名づけよう。名無し君が、深刻そうな表情で立っていた。

「さ、佐竹……。お前さ、生活委員長とそういう関係になったの？」

「はい？」

「だから付き合ってたのかって聞いてんだよ」

「な、何言って」

「そうそう、ボク達付き合ってたの」

そういって、朱音は今度は俺と腕を組む。そこでブイ、と名無し君に向けて笑顔でブイサインを送る。おいこら、俺たちいつからそういう関係になったんだ。

弁解しようとしたら、朱音が後で説明するからと耳打ちをし、その場はあわせることにした。なんやかんや言ってもコイツは俺の大事な友達であり、恩も色々あったりするからな……。まあ事と次第

によつては断るけど。

すると名無し君はそつか、と言ってそのまま歩いていった。一瞬の出来事だったな、なんか。

「詳しい話は図書室でね。そこなら人も少ないだろうし」

「あ、ああ」

朱音はそういうと、俺の腕を話、スタスタと歩いていった。なんかめんどくさそうにため息をついている。ため息をつきたいのは俺のほうだつていうのにな。

俺も朱音についていき、図書室についた。予想通り、中には人があまりおらず真剣に本を読んでいる人たちばかりだ。

「じゃ、あつちの人気のないところ。そこならゆっくり話してもできそうだ」

「へい」

さつきから俺はひとつ返事である。だって、意見したところで聞いてもらえないんだもの。

俺たちは辞典が多い奥のほうへと向かった。まあ辞典なんて好き好んで読みにくるやつはいないだろうし、いなくて当然だろうけど。

「いやあ、悪かったね、さつきは。実は図書室で話そうと思っていて、その前に会つちやつたんだもん」

「ああ、名無し君のこと？」

「は？ 名無し君って誰？」

やべ、俺が命名した名前ですってしました。

すると朱音はそんなことどうでもいい、というように話を続ける。

「んで、さっきの……えーと名前は佐伯君だったかな。その人が、ボクに告白してきたわけ。それで、めんどいから付き合ってるやつがいるっていったの。その彼氏役を活樹に演じてほしいってこと」

「なんでそんなめんどくさい役を俺に……。佐伯君？ って、結構良い顔してたじゃん」

「ボクは恋人とかそういうの、まだいらなから。それに活樹は好きな人いないってたってだし、恋愛とかに興味ないべ？」

「うーむ……まあそうだけど。だけど俺、茶化されるのとか嫌いだからなあ」

「ああ、その辺はボクにまかせておいてよ。活樹の友達なんてたかが知れてるし、その辺にはちゃんとっておくから」

たかがつてひどくね？ たしかに、俺には友達は少ないけども。

「それにもうすぐさ、夏休みだし。人の噂も七十五日っていうじゃん」

「お前のもうすぐって二ヶ月ももうすぐに含まれるんだな。それにあれがあったら、新入生がこの学校になれた頃だからって行う学園祭と同規模の祭り。それにはたしか、男女がペアになって参加するっていうのなかったか？」

「……ああ、あつたね。でもいいじゃん。そこで、ペアが決まらなかった人はなんか物凄いいことが待ってるらしいよ」

「らしいよってお前……。お前生徒会だろうが、知ってんだろ、その辺のこと！」

「うん、知ってるけど。やっぱりサプライズにしときたいじゃん？ だけど、ハッキリ言ってやれるもんじゃないよ、あれは。すべつたら少なくとも一学期中は……」

脅迫だよな、こいつ俺のこと脅迫してるよね?! お前には自分以外の異性の友達はいないんだから、確実にはぶられるよ、だけど自分と組めば助かるよっていう。

たしかにそれは事実だ……。俺は異性の友達っていうか、異性で話せる相手はコイツしかいない。佐武も頭に浮かんだが、アイツはだめだ。アイツは人気者だし俺のことを狙っているし……。

「わ、わかったよ……。そ、その代わりにその佐伯君ってやつにだけだからな、付き合ってると思わせるのは」

「おー、話わかるねい! じゃあ今日、活樹の家に行っても」

「あ、朱音! さ、佐竹とな、何話してたの? 家に遊びに行くとか付き合つとか、その……」

話がまとまったと思いきや、佐武登場。噂をすればなんとやらってやつか? いやでも俺の心の中で名前をだしたただけだし……。いきなりの佐武登場に最初は朱音は驚いていたようだが、次第に何か思いついたのかニヤリと笑う。

「んー？　ただ、今日活樹の家に大事な話があるから、行くって話ししてただけだけど？」

「だ、大事な話って？」

「それは言えない。ボクと活樹の秘密、かつ親密なお話です」

あれ、そんな親密な話か？　いや、でもまあ一応人には知られたくない話だし、大方間違っているというわけでもない。隠す必要はないけど、言う必要もないってことだな。

「まあ佐武、そういうことだ。あまり気にしないでくれ」

「い、いや気になるよ！」

なんなんだ、コイツ。妙に絡んできて……。それに、ここまで狼狽している佐武は初めてみるし、もしかして……。

いつもと様子が違う佐武に、俺はある仮説を立てる。佐武はもしかして、誤解しているのではないだろうか？　俺と朱音の関係を。もしくは先ほどのアクシデントを見ていた、とか。それならば誤解していてもおかしくはないな。まあ友達をこんな駄目男と付き合ってた、なんて嫌だろうしここは誤解をといておくか。それに誤解されっぱっつてもめんどいしな。

「じゃあ佐武もくるか？　俺んち」

「へ？」

「いやだから、なんか変な勘違いしてそうだし。佐武に予定がなければだけど」

「う、うん……予定はないけど」

「じゃあもうすぐで休み時間も終わりそうだから、詳しくは俺んちでな」

こっちのが手っ取り早そうだ。めんどごととはさっさと片付けちまったほうがいいしな。

たしかにそうだけでも（後書き）

すいません、やはり秋ではなく、春の終わりということにさせていただきます。

作品の都合上、そちらのほうがいいと思い、急遽変更させていただきます。今はまだ大して変更するのに支障がないと思いましたが……。

一度投稿しておいてなんですが、これからはこんなことのないようしますので……。

二度あることは三度ある

時間の都合上、朱音と佐武の二人には俺と一緒にそのまま家にいくことにしてもらった。今日は金曜日なのに、何故か六時限まで授業があつたしそのままのほうぐつくり話せると思ったからだ。一回家に帰って待ち合わせしてそれからーなんてなつたら時間もかかってめんどいし。まあ本来なら、一回家に帰らないと駄目なのだがそこはやむえないってことで。それにしても生活委員長が校則守らないでどうするんだよ。

佐武はもちろん、朱音も俺の家に来るのは初めてだ。二人ともなんか知らないけど、物凄い期待しているみたいで楽しみだね、なんて話し合っている。別に対したものはないんだけどな。

家に来る分にはいいんだが、そついや一つ問題があつた。

「あーそつだ。弟妹が家で遊んでるかもしれないが、気にしないでくれ」

「佐竹つて兄弟いたんだ。もしかして、一番上？」

「いや、俺は二番目。上に姉貴がいる」

「じゃあ四人兄弟なんだ？ いいなあ、あたし一人っ子だから兄弟とか羨ましい」

「よかねーよ。弟は俺のこと嫌いだし、妹はアレだし姉貴は痛いし」

俺がそういうと佐武はアレってなんだろう、と考え込む。だがあえて言わない、というか言いたくない。アイツからいつも来るのに、俺がいつも痛い目線を送られるからあんま人に知られたくないんだ

よな。よく考えたらうちの女共にろくなやつっていないかね？ ……
やべえなんか悪寒が。

思わず後ろを振り返ってみると、誰もおらず俺はふう、と息をつく。前、いないかと思つて姉貴の悪口いつてたら後ろにいたんだよな、いつの間にか。あの時の恐怖は忘れられない。

「活樹の弟妹つて双子だったっけ？」

「おう。あんま似てないんだけどな、あの二人」

「でも下がいていいね。ボクなんて末っ子だからさ、兄ちゃんや姉ちゃんにコキ使われて……たまったもんじゃないよ」

朱音さん、もしかしてそこでたまつた鬱憤を俺にぶつけているのですか？

家につくまで、兄弟の話で持ちきりだった。主に俺は質問される側であつたけど。佐武には姉貴や妹はどんな感じなのと聞かれ、朱音には弟をコキ使いたいくらくれなどという会話を繰り返していった。家でも可哀想な位置づけだが、こういう会話でも陽介は残念な位置である。だけでも同情はしないぜ、確かに陽介も可哀想に見えるが一番可哀想なのは俺だからだ。決して自画自賛などではない。

今まで説明する機会がなかったからここで言わせてもらうと、俺んちはマンションの一室を借りている。結構高級なマンションで、部屋数が多いっちゃあ多い。だからここを借りたんだろうけど。

家の中に入り、ただいまと声をあげる。後ろの二人はお邪魔しますと言つて靴を脱ごうとすると、ドタドタと騒がしい足音が今日も聞こえてきた。今日も神林さん達がきているのだろうか。

ガチャ、と勢いよくドアが開くと案の定、神林さんもきていたのか日向の後ろに立っていた。

「おかえり、おにい……さま？ あれ、おにいさまのお友達？」

「お邪魔させていただいてます。活樹さん、こんにちは！」

「こんにちは。 えーと二人とも俺の友達で、こっちのポニーテールが五十嵐朱音、そっちのロングが佐武渚。それとこいつが俺の妹の日向で、日向の後ろにいるのが日向の友達の神林さん」

俺にとっては佐武や朱音、神林さんがいる以外、普通どおりなので簡単に自己紹介をする。けども、佐武は物凄くひいたような目で俺を一瞬見たが、朱音はいつも通りの笑顔を浮かべながらも挨拶をする。あれ、俺佐武になんかしたか……？

「こんにちはーっす！。えーと、今活樹に紹介された通り、五十嵐朱音です！ 活樹とはそこそこに仲良くさせてもらっていたり。よろしくー！」

「……こんにちは。あたしは佐武渚です。よろしく」

「佐竹日向っていいいます！ 私の活樹おにいさまがいつもお世話になってます。こちらこそ、よろしくお願いいたしますー！」

「神林沙月です！ よろしくお願いします」

何故か文頭の私の強調させる日向。それにより、更に佐武は顔を引きつらせた。

さて、みんなの自己紹介が終わったことにより、俺は二人を部屋に案内しようとするが、日向がいつものように腰に抱きついてくる。おにいさまーと変に高い声をだして甘えてくるのもはや日常であり、もうあまりなんとも思わなくなった。慣れっというのは恐ろし

い。だけど何故か佐武は先ほどのように引いたような顔を　　つてあれ、さつきもこんなことあったよな。

よくわからないまま、そのまま部屋へと向かう。部屋の前につき、俺は日向を離れさせるため頭を撫でて自分から離す。日向と神林さんはゲーム部屋へといき、俺は二人を部屋へ入るように促した。

適当に座るようになると朱音は俺の勉強机のイスに、佐武は朱音が座ったイスの近くの床に女座りというのだろうか、その座り方で座る。俺も佐武と適度に距離を置き、あぐらをかいて座った。

「で、昼休みの話なんだけど　　」

「ちょっと待って、佐竹。なんで何事もなかったかのように普通に本題に入ってるの？」

「は？　なにいつてんのおまえ？　何もなかっただろ？」

「妹さんのこと！　おにいさまなんて呼ばせてたの？」

ああ、だからあんな引いたような顔を……。なるほど、合点があった。でもやっぱり予想通り俺を責めるのね。

「アイツがそう呼び始めたんだよ。俺がそう呼ぶようにいったわけじゃねえ」

「ナギちゃん、活樹の妹がブラコンだって知らなかったんだねえ。まあボクも初めて日向ちゃんを目にしたんだけど」

そういつて朱音はくるりと回転して、イスを跨ぐように座り、背もたれのところ両腕を置きその上に顎を乗せる形で座る。こいつ、スカートを穿いてるって忘れてないか？　俺の位置からだ、パン

ツが見えそうで見えない。いや、別に残念とか思っていないから。
佐武は朱音のその一言で不機嫌になったのか、ふんつと俺から顔をそらした。いや、なんで俺に怒ってるの？

「えーとまあ、妹のことはどうでもいいとして、本題に」

「どうでもいいとかひどいよ、おにいさまー！」

その掛け声とともに、ドアが勢いよく開く。いつになったら本題入れるの？ 主菜はもうきてるのに前菜ばつか食わされてる気分。
他に後ろには陽介、神林さん、月城さんがいた。陽介はあちゃーっというような顔で片手を頭にあて、神林は真剣な表情で月城さんはあわてた様子でこちらをみている。

揃いも揃って、何やってるんだか。だけでも、言わなきゃいけないことはあるな、兄貴として。

俺は立ち上がり、日向の前へ行き視線を合わせるため屈む。

「……まあ聞かれて困るような会話じゃねえけどさ。盗み聞きするのは感心できねえな」

「お、おにいさま。私はただ、お茶菓子を」

「言い訳はいい。俺さ、前にお前らになんて言ったか覚えてるか？」

「……自分が悪いと思ったら素直に認めるようにしなさい……」

「そうだ、確かに言った。まあ人間だし、やっちゃだめだっていわれるとやりたくなることもあるかもしれねえ。確かに俺もそういうことがあったしな。だけど言い訳する前に言うことがあるだろ？」

「は、はい……。うう、ごめんなさいおにいさま……」

「よし、許す。陽介も、言うことないか？」

「わ、悪かったよ……兄貴」

「許す許す。じゃあこいつらと話が終わって、送っていったらあとで遊んでやるからゲーム部屋いってろ」

日向と陽介ははい、と返事をくれると素直に部屋からでていった。最後に日向がしょぼんとした表情で頭をさげ、ドアをしめていく。俺はふう、と一息をつくと先ほどいた場所に再びあぐらをかいて座る。

「悪かったなあ、あいつ等が変なことしてよ。それじゃ本題に」

「いや、ちょ、活樹ってちゃんとお兄ちゃんやってるんだね！ボクの兄ちゃんなんて悪いことしてもっていうか、兄ちゃんをボクが注意してるの?!」

「マジヤバイマジヤバイマジヤバイ」

二度あることは三度あるってやつ？ もう勘弁してよ、三食前菜飽きたヨ。いい加減メインディッシュ食わせてヨ。

朱音は珍しく俺に感心してるし、佐武にいたっては頭を抱えて顔を隠すようにずっとカタカナでマジヤバイを繰り返している。今の佐武さんのほうがマジヤバイ。

いつになったら本題に入れるんだ、と俺はため息をつきこいつらの興奮がやむのを待った。

二度あることは三度ある（後書き）

執筆欲がやまない。助けて。

毎回題名をつけるときに悩んでしまう。でもありきたりでいいよね、うん。

それにしても塾で英語がやばい。毎日勉強しないと……。

感想、評価、悪い点など随時募集してます。大歓迎です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2164z/>

佐竹さんちの日常

2012年1月6日00時50分発行